

莫生

第一卷第三號

「私どもには慰さめ合ひ、勧め合ひ。一切の形を超えてお朋だちにならずには居れぬ時が参りました」
 「吾れ我れは自己を殺して進んで居はせなかつたか、他を見誤つてはるはせなかつたか、我々の世界はもつと寛い筈だ」
 「我れ我れは兄弟ではないか、それをなぜ垣根を造つて岩を固うしてゐるのだ。もつと素直ほになれ我々には今迄に知られなかつた愛の世界が光つて来る。本當に睦み合はう」
 「佛は一切を恕して和合する「僧」の中に生き給ふ。「オイ友よ」と呼びかける内に光り給ふ。お互に信ずる事に因つて結び附いた程堅いものはない、強いものはない美しいものはない。それが救はれであり、救ひは佛から教へられた丈けの儘であつてはならぬ、寢さして措く概念ではない。
 「救ひの可能と成就は私たちの上に事實でなくてはならぬ。それを學んだ丈け、知つた丈けで藏つて置いてはならぬ。實際の上に使用はねば駄目だ。それは「挟け合ふ」事である」

生 眞

第一卷第三號

己にあらる光り

目 次

生活の深化	土屋 觀道
佛の二面	中野 尅子
懺悔録(續)	濱 阿 彌
それでも生きねばならんのか	自由俱樂部
「吾が朋」便り	

○私共の日常日々の生活の中に於て何か一番楽しい人生の生活であるかといふに、私は如來を中心とした理想實現の生活はと此の世に楽しいことはないと思つてゐます。

○如來は私共に對して常に理想の中心となつて下さいます。力なき時の救ひとなり、あらゆる活動の源泉となつて下さいます。さうして如何なる場合にも絶對に變らせ給はぬ無限の智慧と慈悲とをもつて一切の願ひを叶へて下さいます。

○如來は全智全能の宇宙の大ミオヤとして私共の信仰の對象となつて下さいます。

○如來に法報應の三身ましますのは本來一如の大ミオヤが暫く私共の爲めに現はれて下さいました御姿に過ぎません。一如の如來なればこそ一如の三身とも信せられて下さるのです。

○如來三身の説は一佛觀察の三面に過ぎません。三身を各別と見るのは別教の見方です。

然乍一應三身各別に拜察し得らるゝのも亦如來の大慈悲と信じます。

○觀る人の觀方にもよりませうが私共の信仰の對象は報身を表としたる三身一如の大ミオヤであります。これを神とあがめ、如來と呼ぶも夫は各自の御隨意です。さうして私共は此の大ミオヤこそ即ち淨土宗で云ふ處の阿彌陀さまだと信じてゐます。

□皆んなが無くしてはならぬ最尊の王様です。皆んなが寄り合つて統一を造つてゐる。土臺石から屋根のペンペン草まで、持ち合つて生きてゐる美しい法界です。他を壓したとて押し除けられる世界ではない。相對性原理で引附き合つてゐる堅い團子である。

□煩惱具足の凡夫である。無有出離之縁の罪人なりと悦んでゐてはならぬ。お慈悲の製造元であつてはならぬ。地獄の佛を渴仰して住まつてゐてはならぬ。センチメンタルデカタニズムは智者の迷ひである。悪魔に魅入られたる佛の姿である。

□詭辨や觀念の上に戲論御殿を築いてゐる事は危い。かと云ふて神祕的儀式や律法の中に盲目的に埋つてゐる事は猶更ら恐ろしい。正しき安心と起行思想と生活の上に新人道がある。來る可き宗教が啓けつゝある。

□一瞬間も停滯は許されぬ。佛の光りが刹々に己れの内に火花を散らしてゐる。み旨が稻妻の様に軀の各部に傳へられて生活の上に具象化される。如來吾れに生き給ふ。「聖意顯はす身とならん」。

□己れに在る光りに依て自分を導け、何の惑ふところもなく常にキツパリと、執る可き路を即刻教へて下さる。己れに在る光に因つて他と偕なれ。そこに總ての運動と事業の純化がある。進化と完成の大道が啓ける。一切を籠めた光りの旋回があり。無限の創造界として一大法然の如來相がある。

□つ愚に還つて自己を握らう、内外に充ちた光りを見出さう。そして生活の上に光りあらしめん。

生活の深化

士屋觀道

吾人の宗教は我れを値ちある者、人たらしむる處の宗教である。自己の生活を反省し洗練して本當の自己、一切佛一切神を禮拜する程理想を充實せしめんとする希ひである。各人が自ら自己の自覺を拜する程の緊張さに立つこと、其れが何よりの宗教であり、眞實生活である。「最も値ちある生活に生きる」此意味に於て現代は漸く醒め來て、吾人の理想に合致し接近せんとしつゝある。即ち世は擧げて眞實生活に向ひ宗教化し來れるのである。

自由が總ての方面人心中にも兆して來た、此れが萬人の望みであり而も正しいものである、眞の自由は我儘ではない。我等の自由は他人の自由をも認むる自由であつて、束縛や強制を離れて侵かし犯されず俱に生きる自由である。然らざれば我儘の衝突となつて了ふ。從來の自由は多く物的衣食住の自由にして精神的自由——價値の問題を缺く事夥しかつた。國家も個人も各衷心的價値の根柢へ喰ひ入つて居らず、唯徒らに自己の欲する勝手な方向へ計り走つてゐた。然し斯かる時代は過ぎた。經濟のみに全部を費して居る様な事は欲しなくなつた。即ち眞理想が要求され昔の如うな單理想主義も亦顧られなくなつた。空想生活を破つて眞人生問題に深刻に突き込んで來た。そして其裡から再び價値とは何ぞ、理想とは何ぞと省みて、其れを自己の生活の上に力あらしめ見出す已まぬまでに眞劍な時である。自己に無限の希望と力とを興ふる宗教が切實に要求され、又得ずんば已まぬと迄自覺して來た。即ち自己中

に「不滅の自覺」を見出す事に依つて其等一切を解決し盡さんとするものである。

孔子は「丘の祈りや久し」と天に祈られた、天を心とする孔子の態度は正しく現代人の態度でなければならぬ。天の使命を使命として靈に生きることは當に一人に必要であつた計りでない。キリストは神の心を我が心として顯はした。神として現はれしキリストと孔子と二者其何れをとらん。吾人の生活の上に神の心を心として神の心を現はさんとするとき無我の大道が啓けて來る、神としての道が現はれて來る。其一を吾人の生活の上に直ちに現はして行くのが、孔子に生きるのでありキリストを信するのである。佛教を傳道せし釋尊にあつても其間三段の變化を示してゐる。其大乘佛教としての釋尊は單なる佛を崇拜するに終らず、我も亦「成佛」せんとの力である。助けられる救はれるとのみが宗教でない。頼まんとするにも如何なる心を以て頼むかが問題である。眞に悔ひ改め本心に還る事が先きであり、念佛するから助ける祈るから助けると云ふものではない。而して此内と外との調和解決が宗教の全體である。

釋尊は此二面を理想と其達する方法として説かれた。理想あつて方法が生ずる。而らば眞の理想とは何であるか、即ち不滅の自覺を興ふる事である。不滅を實現する自己であらねばならん。生命と生活とが一致し、理想が現實の一つ一つに光つて値ちあるものを發見し一として現はれしめねばならん。而かも論理的無限の内容を要す可きである。不滅の自覺——とは我は宇宙の一人なり、我は法界の現はれなりとして一切悉く自己の中に露はれて來る。意識的にも無意識的にも總てが宇宙中の存在である。諸有ゆる顯現が差別的に宇宙の一つであると共に、其一つを現はす爲めに他の一切が存在する、我と宇宙とは一體であり。我は法界を取つて代はる眞實であり價値である。即ち自己の不滅を明かに映す、此

絶對的氣分に最も成り切つた時が眞の不滅である。眞に自己を愛する事が出來ず滅我ならば自己を充たす事は出來ぬ。不滅の確立の爲めに不満と困難とに克て絶對的満足に進む、周圍の壓迫と誘惑とに關せず最後の勝利を嚮望して躍進する、そこに眞實生命があり、生活があり、理想への方法が確立する。自己の「行ひ」に値ち無くんば永劫の滅である。死である。生命とは正しき動きである、妄動に非ず停滯でも無い。念佛とは妄動を止めて再び動かんとする源泉に還る姿である。超躍を籠めた静かな反省である。眞の大活動の前程として入山も必要であり坐禪も必要である。即ち宇宙の生命を自己生命として現はす爲めの祈りである。中心たる絶對佛、神を我心とするところに個性の意義價值がある。我が大我の裡に没在し大我の全分が小なる我に即して現はるゝところに限の力がある。無我とは小我を無視する心、絶對に即し彼此無衝突の情態である。絶對に歸命し歸依し南無する事に依つて、本佛を本心に自覺し、佛に勧められて行く、而も此終始伴つて唯彼此一體無礙に行するより外宗教はない、只仰ぎ只祈る連續の充實より外はない。

我々の受けたものの中には其れが不幸であらうと所謂苦であらうと、總てが尊く恩寵であり救ひである。此受けた力で社會に歸るが社會奉仕であり。若し歸命と祈りを忘れた奉仕なら奴隸に終る。全ての人の力となり、如來のみで満足さる。一切理想としての佛であり、一切衆生あつての神である。佛を知つて佛を行するのである。人の理想を理想として生きる時自己も満され怨み無く悔もない、我が盡せる事汝も知らんとの根本的満足の中に自他共に容られ又二つ作らない。唯斯く動きしものが神の心であり、此理想が阿彌陀佛の心である。即ち如來其儘の相である。唯だそれが概念や觀念でなく「一切衆

生を佛たらしめん」との本願の現はれである。自己のみが佛たらんとするに止らずして、自己の總ての要求を一切衆生救済の上に投げ、同發菩提心、俱に等しく佛たらんと希ふところに眞の大悲がある。自己の理想を他の總てを通じて完成せしめんとする、此れ他力の救済であり。自己の欲する處を他をして亦翼はしめんとするより大なる愛はないのである。而も其れが本心の正しき希望であると共に亦他の一切の者の衷心より欲求するものに在るに於ては一層此感を深くする。彼此一體にして此完全を事實の上に築かんとする運動こそ、救ひと救はれの全てを含めたものである。そこに意義ある生があり、總ては此を基調として起るものに非ざれば根の無い枝であり、皆直ぐ枯れて了ふ。

我々は此美しい自分と人とを同時に認め様とする根本精神より總ての改革も事業も涌く可きである。此體驗を基軸として諸事悉く辨ぜらる可きである。而し是れは全人を救はんとする神の愛であり、佛としての使命を果す佛心であり、現實の我より遠き絶對自由である。我々は此佛の世界を望んで扱て如何程自己の内に愛が成り立つてゐるかと思ふとき切實に罪惡を感じる。神や佛の罪に非ず我罪である。神や佛は我罪を救さんも我れは許す事能はずとの自律的の罪である。我々が眞の親切をなしつつあつても人が賞せず、又親切を偽つて居る時に却て人が賞する事もある。唯だ眞實は内のみが知る。不滅の愛を行はんとするも我力無し、佛に依りて靈化されんとするより外なし。自屈や妥協では無い眞に自己を信じ切つた最も強い情態である。神に救しを乞ふよりも自ら懺悔し、自ら足らざるを反省して一つも力の無いものの中に向上の佛力を打ち出して行くものである。佛の宥しの有無に係らず常に我には痛烈な悔改めがある。そして終に犯さざるに至る。永劫に犯さざる不滅に入る迄、生きた價値の刹那を積まんと

するものである。それが念佛であり、反省であり、無限の向上である。此精進が生活の全分である。斯くして育てられ、育てられた力を以て一切行動に事業に出て行くが體驗であり還相であり。生れ更つた現實である。宗教的自覺とは眞に目醒めて個人國家の上に此大理想を如實に運動示現せんとするもので、佛の理想よりして一佛より一切佛に及さんとする、全人類中心の眞實活動でなくてはならぬ。そして其れが人としてのある可き路である。(速記抄より)

美しい塔の上を仰いでゐる心と、高い處から凡迷を見下してゐる心と、塔を降りて群衆と押し合つて居る心と三つとも夫れその感じがある。而し三つとも味つた人丈けが本當に其一つを味へます。何處に居る時も嬉しい、尊い、光つてゐる。けれど一つに耽美してるとき實は死であり苦である。常に變化を求めて行くとき望みと力が湧く。

今の儘を本當に満足するとは不満を感じ得る人でなくては出来ない。惡きを許し乍ら善を慕つて行くのは、惡にも悦んで居れぬ苦しき樂しさである。「惡人をほ生る況んや善人をや」最難行まで徹した形が外から見ると易行である、易行を幸ひとするとき墮落であり。地獄であり、因果であり悟つた風の迷ひである。初めの地獄は人間が陥ちる、二度目の地獄は佛も墮ちる。地獄の背渡りが人の道佛の道である。

佛の二面

中野 尅子

私には二人の佛が現はれる。

「此處迄御いで——」と遠方で手を拍つて呼んでゐて下さる佛と、今にも倒れさうな足取りでヨチ／＼歩いて行く私共の手を採つて「危いよ、此方へ御出で——」と導いて下さる佛、二人とも私には無くてならぬ佛です。

○彼は私から超絶した神であり、此は我に俱なる神である。彼は完全神であり此は未完成神である。彼は止まり此は進む。

○一は穢を離れた淨であり、他は穢に即した淨である。彼は澄み此は澄まんとする濁りである。彼は輝き此は曇る。

○彼は不動であり、不變であり、不滅であり、絶對である。此は變化であり、進動であり、相對である。彼は無限であり普邊であり、此は有限であり特殊である。彼は究竟にして此は創造。彼は終點にして此は起點である。

眞生

○彼は本質であり此は作用である。彼は法身であり此は報身であり。彼は父なる神であり此は内なる聖靈である。

○彼は凡夫を惑れむ佛であり、此は佛は希ふ凡夫である。彼は極樂に居し此は穢國に勤む。彼は天國の主であり此は地上の聲である。

○彼は本佛此は迹佛。彼は性であり此は修である。彼は理にして此は事である。

○一は調和であり、他は矛盾。一は原理であり一は現象である。彼は綜合此は部分。

○彼は光りの光であり、此は闇の光りである。彼は向下の來迎であり此は向上の請求である。彼は心此は行。

○彼は無爲無餘にして此は有爲有餘、彼は菩提此は煩惱、彼は純善であり此は惡人の遷善である。

○彼は渾然であり此は破壊、彼は悦びの中の悦びにして此は悲しみの中の悦びである。彼は日中であり此は夜明けである。一は白一は黒。一は聖一は凡。

○彼は抽象にして此は具象。彼は概念此は生活。

七

然し三人は一人である。即であり、如であり。融であり、攝である。彼は唯一なる大である。輝きであり温たみである。生命であり、事實であり人格である。實に力としての最も明かなる存在である。我をも他をも籠めた一切であり、超越にして内在、獨尊にして統攝、離言絶慮の大中心である。本尊であり樞であり又末である。

其一面のみを固執するのが硬化した神學者や癩病患みの様なデカタン主義である。一がピユータンなら他はソフイストである。彼が舊信仰家と貶されるなら此は過激信仰家として嗤はれる、一人は浄土に伸欠し一人は地獄に悦ぶ。彼は未來に生き此は過去に生きる。而かも其一に徹底して生き味ひ抜いた時には斯る偏は無く必然に他に合する。それ程兩者は一である。

過未と共に現在に、理想と共に現實に生きんとする吾人は屈折れたり空ら悦びに甘せられぬ。妥協でも無く遁避でも無く、センチメンタリツクでもなく、狐惑的な神祕主義でもない。白日の下に堂々と躍進する正大なる精神である。二つの力が一

なるものとして噴き騰るとき、何よりも高く何よりも強い。淳化と更生、淨化と深成、無礙の奮闘不斷の眞生が自由の濶天地を啓く。無作の藝術境が足下に擴がり、充實した宗教界が眼前に展開する。佛とか我とか一切を亡じた、唯純一な祈りの世界が其儘絶對であり光りである。祈りの聲が六合に充ち充ち、六種に震動して一切の隅々にまで響き亘る。我等は其祈の裡から佛と我とが一つなつて生れる、我として佛が行ずる。全てが生れて無限であり無盡である。三昧現成して悉くが七色の輝きを放つて其上に浮ぶ、形容し得ぬ微妙な世界が眞に一大事實として嚴存する。たゞ讚歎が雨の様に降り灌がれる、音なく色なくして然かも顯然たる事實である。

唯稱名南無阿彌陀佛

「お花見は塵うでした」

「矢張り机の上の花が一番綺麗ですわ」

佛は何處——？

懺悔録 (續)

演 阿彌

あゝ海の如き大慈悲に在ます如來よ、私として更に大なる罪惡を懺悔せしめ玉へ、そは今迄述べたる偷盜と妄語と綺語と暴慢とは其當時直に暴露されましたが、次に云はんとする所のものは、私の胸底深く秘められた事柄なのであります。否なアナタは餘す所なく知り玉へども、私は秘したるが故に罪に罪を重ねて居りましたものなのです。

憐む可き少年であつた私は、一人の友が最も精巧に出来て居る竹の弓を持つて居るのを見て羨みました。彼は彼の父が竹細工に巧であつたからかう云ふ物を所有して居たのです。それは到底金では買ふ事の出来ないものでした。さればと云つてあきらめる事は出来ない。私は所有慾にもだえたと欲しくて欲しくてたまらない。呉れと云つたとて呉れる氣遣ひはない。欲しい。本當に欲しい。モウ堪え難い貪慾は終に少年の心を暗くした。あ明るく純眞なる可き少年の心は貪慾の黒雲に蓋

眞生

はれて仕舞つた。私は盗んでやらふと思ひ定めました。而して其友の家を注意し初めました。あゝ何と云ふ心であつたのでせう。十界互共と云ふ事は明了なる事實なのです。私の心の中には今でも此の様な汚穢な心がひそんで居ります。あゝ今でもです。あゝ如來様！今でもです。何と云ふ淺ましい心でせう。さすがに盗むと云ふ心はありませんが、欲しいと思ふとやはり非常に欲しくなります。此の貪慾の心です。何日になつたら此の心がなくなるでせう。あゝ如來様！私は或夕其弓が其家の軒端の釘にかけられた儘であるのを發見いたしました時、如何に胸をどらしたでせう。私は夜の更るのを待ちました。父はもう寢床に入りました。母は余念なく夜仕事をして居ります。私はそつと裏へ出ました。ぬき足差し足して其弓に近付きました。見よ月は皎々として天地を照し玉ふて居る。私は前後左右を見廻した。而して其家の中の氣配にも注意した。あゝ月にうつれる私の影！私はためらつた。あゝよさう。でも欲しい。よさう。欲しい。今盗らねば盗る時がなう。

此の様な心の動搖の後、終に盗み取つて足早に逃げましたが直様納屋の或場所に隠して仕舞つた。あゝ私は終に他人の物に迄手をつけたのです。翌朝其友達は頻りに探して居りました。私は注意深く知らぬ顔をして一處に探してやりました。私が盗んだとは誰が思ふものですか。近所の人誰一人私を指す人はありませんでした。私はまづよかつたと密かに胸をさすりました。私はこそばゆい様な苦しい様な心と、よい物を所有し得たと云ふうれしくもないうれしさと、悪いことをして仕舞つたと云ふ自棄的な大膽さと而して愁しい後悔とを味ひつゝ、私の心の奥底に大きな烙印を捺して仕舞つた。折角苦心して得た其弓は再び世に出づる事能はずして、徒に納屋の隅で朽ちて仕舞つたが而して其本當の所有者は如何なつたか、今は人々に名前さへ忘れられて居るが、私の心の底には三十年後の今もあざやかに残つて居つて夫を思出づる折毎に慚愧の冷汗を覺ゆるのであります。あゝ恐しき私の幼年時よ。斯くの如き偷盜と妄語と不孝と叛逆とに依つて貪と瞋と痴とに輪廻せし事を。

あゝ恐ろしかりし幼年時よ。

(此頃初めて辨榮上人に御目にかゝる)

おゝ。私に恩寵に在ます如來様よ。偽る處なく飾る處なき今迄の記述が眞實であつた如く、以後の記述も私をして安忍と眞實とに在らしめ給へ！私が高等小學へ這入りました時、私の世界は頓に展開されました。交際が廣くなるにつけて私は法衣を着せられるのがイヤで、たまりませんでした。漢籍や佛典を教へられるのもイヤで、たまりませんでした。それでも瘤は三日に一つ五日に一つと云ふ様になりました。それから何時とはなしに異性に對する愛慾の心が私の中に内在して居つた事を氣付いた時私は一種云ひ知れぬ美妙な軽い驚きと滋味深い温かみとを感じました。如來様！。私は其頃戀とは名付けられない、程の淡い戀を感じて神に日參した事がありました。今思へば此頃は神も佛も目に見えぬ神權。不可思議力、祈ればかなへ給ふと云つた様な、誰でも子供の時には持つて居る一種の信仰が矢張あつたので

す。神と佛とは同じ力と人格とを持つて神は神の國に佛は佛の世界に住みて群れ居給ふと思つて居つたのです。而して佛は死後を安樂になさしめ神は現在の願を聞入れ給ふ者であると思つて居りました。佛の中では阿彌陀様が一等多らしい神の中ては有縁の神様が一番よく自分に味方して下さると思つて居りました。其處で私は、あゝ、あわれ愚かなる者よ。私は三十日の祈願を込めた。而して私の戀の心が日増しに倍加し戀人の心が日増しに私の方に傾く様にと願つた。其象徴として御賽錢を倍加して行くことを誓つた。あゝ其誓の心の如何に弱かりしよ。力なかりしよ。三日四日と御參りました。段々驚いた。五日六日。益々驚いた。而して其無望に驚いた。馬鹿な事を誓つたものだと思ふ後悔の念は私を殆んど困惑させた。本當に馬鹿な事をした。少しためて置いた金は無くなつて仕舞つた。私は法律の御供などをさせられて少しは御金を頂いたのでしたが、見る／＼内になくなつて仕舞つたのです。かくて私の戀は此の三十日の祈願がわずかにして破れた如く成就す可きもの

でないとして、舌をかみ／＼斷念して仕舞つた。

むしろ戀とは名付く可きてない淡い／＼而して一般性を帯びた異性への思慕に過ぎなかつたのでした。然し乍らからした心の求めは段々深く成り行く事を感じつゝ、小さい胸に空想を畫いて居りました。あゝ痴れたる少年よ。登る路もない山岳にあぐがれて、踏んだ事もない曠野にさまよふ事が何故好ましいのか。あゝ愚かなる少年よ。涯も知れない大洋の唯中の櫓櫂もない小舟が、なんで楽しいのか。私の如來様よ。私のあの頃は。總て塵埃に等しいものに歡呼して居つたのです。泡立つ泡に酔はふと思つて居つたのでした。然し乍らあゝ如來様よ。私のあの頃の小さき胸の而かも限られたる無力に等しい力の中に、あらゆるものを……あゝ如來様よ。あらゆるものを私の中に、私に依つて産出す事の如何に幸福であらうかに憧憬れて居つたあの頃が、なづかしい様な氣も致します。モウ一度あの時分から出直して見たいと思ひます。

私は又一方に葬式や法事に供させられて、一層寺と云ふもの呪はしくなりました。死んだ人計りを取扱ふ坊さんと云ふ職業などつくづく思ひました。自分は塵うして寺へなんかへ生れて来た

のだらう。天子様の處へでも生れて来れば良かったのになあとよく思ひました。本當に呪はしい坊さん！、と私の心の中には欲する路と厭ひな路とが段駈け距つて喧嘩をする様になりました。

自由俱樂部——蠶の數で七枚半。蒲團を揚げれば座敷ともなり、編輯室でもあれば書齋兼食堂、五十燭が點々と座談會場とも化ける。落ちた蛋も喜んで享けるが、落ちてる奴は拾つても下さる。壽家も詩人も商人も官吏も、男女坊さん牧師、若いも壯年も、社會主義も人道主義も。異る儘敵の儘で心から話せる、俱樂部の中へ這入るとある温いモノに自然に支配されます。それで「心の集り」春の集ひ」と云てゐるのです。そこでお互の魂に鐘をかけるのです、政策や強要で束る時代は過ぎました。自動的僧團こそ力です。誰方でもおいで下さい、温茶が待つてゐます。

悪いと思つた時悪いのぢやない、善いと思つたとき善いのぢやない。只無作自然に生れるもののみが絶對で、眞實はそれのみが可能だ、無記とも云ひ度くない、ただ其縁起が無盡なるとき佛の姿である。善い悪いを云ふ前にもつと創造的でありたい。

「好い時候になつて参りましたナア」テ
解り切つた事、云はなくとも濟む事を、言つて行く裡に無限の味があります。不得要領の世の中、救はれないのも救はれたのです。

それでも生きねば
ならんのか

自由俱樂部より

「社會は決して美しいものぢやありません、統一あり総合的な完全なものぢやありません。矛盾だらけ、壓迫と強制と掠奪と虐待とが充ち充ちて居ります。私は財産を失つた、此れも人か誤間かされ捲き上げられたのです、そして私は一生懸命に働いた、が私の眞實は常に不眞實として取り上げられ、其眞實だと知つて居り乍ら白面ばくれて難癖を附けられました、正當な酬ひは一つも無く常に我々は泣寝入りするより外ありませんでした。そして小さく正直にする者は泥棒扱ひにせられて巡査に遂ひ廻され、大きい泥棒が一層翼を擴げて甘い汗を掻き集めます。私共が偶まに彼等の袖下から一寸いと餌に手を出すと、直ぐと手を切られ其上縛り上げられて獄に投ぜられます、辯解の餘地すら與へて呉れません。我々に正しい事が彼等には罪惡に見えるのです。所謂正しい事ばか

りして彼等の御咎めに逢はない範圍に生きねばならんとしたら、私たちは手も足も出さず、徒手して腹の内から陽溷らび上るのを待つて居らねばなりません、何が正しいやら何が善やら薩張り解りません、唯だ力が勝利であり、勝利が正義であり、強い剛突張り共に都合の良いのが制度であり秩序であり、私どもから見たら矛盾だらけ罪惡だらけです、何處に統一と調和がありますか。此を喜ぶのはブルジョアに阿附する道化者か、温室育ちの坊ちやん連中の事です」。

「あなたは部分的に計り見て居られる、あなたも一人のブルジョアに過ぎません」

「けれど此塵撞着を幾何綜合したとて益々大きい背馳と相反を造る計りぢやありませんか」それも一つの見方ですが総合的觀察と云ふのは全體を高い處から俯視してそれから其中の一つに就いて見るのです、あなたの見方と全く反對に別の方から視るのです、多と云ふのは一の集積であると云ふ意味より、多は多として一である多の中に各一があるのと見るのです……全的に見たとき總てか

肯定され矛盾の儘が偉大なる調和です、美も善も正も平和も統一も醜惡或は戦ひ特殊を離れて無いのです、悉くが相對的であり、絶對的にあなたを満足せしむるものは無いでせう、唯不完全の儘を如何に完全として生かすかが可能なるものです」

「すると諦め主義、泣き察入り方法が解決でありそれが宗教であると云ふのですか、此儘がお恵みだ恩寵だ悦べ頂けなんて殻騒ぎする人の氣が知れませんが、それが佛の慈悲なら私は其佛を破碎する、其塵安價な信仰で糠悅びしてる奴等を笑殺してやる、私は飽く迄此背反を呪ふ、そして此状態を造つた者を怨む、それが惡魔の姿だと云へば、言へ、私はそんな無反省な妥協主義專制主義には屈する事は出来ぬ、忍従や安請合ひで一時的に極樂を覗かして貰つて御馳走で嘔吐される様なお入好ではありません。地獄墮ちで結構、惡魔の劫火で其塵馬鹿者共を皆んな葬つてやりたい位です。」

「あなたは本當に佛の通りの説法をなさる」

「エ？佛は塵塵ことは言はれぬ筈です、此塵事を叫ぶは惡魔です佛は此塵奴を罰せられるべきでし

ち願望を斷つものです、あなたが其れ程のドン底に居り乍ら尙且つ生きて行かねばならんとは何と云ふ偉大な事實でせう、あなたは其無限の慾求を懷き乍ら少しも其れに向つて進まうとせずして、徒らに聲を大きくして惡魔に遠吠へして居らるゝのは弱者の態度です。其絶對不満を感じてゐる心が矛盾から出て統一に入る第一の流れです。もつと其苦を突詰めて御覽なさい、あなた自身をも破却して慕進して御覽なさい。まだ怨み方が足りません。周圍の一切は勿論破壊せねばなりません。あなた自身は其儘で善いてすか、完全ですか、自分自身を愛せずば戀人があなたを捨てて去つたのは當然です、本當に他を責める資格があなた自身に在りますか、自己が不完全な眼を備へて居たのぢやありませんか。少くとも自分自身が不完全でも他丈けは完全に見ゆるが普通です、自分の不完全を捨て、置いて他の完全をも時には不完全に見んとする如きであつたなら矢張りブルジョアですよ、私が綜合的觀察をなさいと云つたのは此點です、自己を無理強ひに屠れと云ふのぢやありません

よふ。」

「あなたは死にたくはありませんか」

「死なうとしても死ねるもんですか、私は是れから飽く迄反逆を續けます、佛の敵です、呪はねばなりません、私を苦しめ虐げるブルジョアと闘はねばなりません、宗教をブツ潰して我々の王國を建てねばなりません、私には未だ云はぬが親に對する怨みと、兄に對する惡くみと戀人に對する復讐とがあります、人に對し國に對し社會人類に對し、神に對しても十分仕返しをせねばなりません、ただ花や鳥丈けが私には友だちです、」

「あなたには切つても切れぬ力がある、惡魂しいの奥で鎌首を擡げてゐる一の願望がある。壓へても壓へても潰されぬ新芽を萌く力がある。それがあなた自身を自ら縊らせぬ、其れがあなたの生命でせう、全體でせう——それをあなたは惡魔だと勝手に決めて居られる、惡魔の怪靈だと自ら抱いて自ら怖れて居られる、今迄あなたが云はれた事は惡魔が云つたのでなくて、惡魔を怖れる佛が云はして居たのです、本當の惡魔はあなたの生命即

ん無我とは自己を殺せと云ふのぢやありません。唯正しく自己を見る即ち他を觀察する謂です。其時必然に自己の罪惡に目醒めさせられます。生きねばならんあなたは佛の姿です。

圓滿完成を望んで止まぬ心、無限に欲求して既成を亡ぼして行く形、伸び伸び、發展し發展して盡きぬ創造の進み、それこそ本當の佛の心であり神であり我れなのである。自己を呪ひ得ない者が何んて佛を呪ひ得るか、「是れで救はねば本願は誰だ」と佛をも怨み得る程であつて懺悔と歸命が眞に痛く。佛と惡魔は一であり、地獄と極樂は一つである、否定の世界は肯定の世界、苦は樂であり、悲しみが悦びである。捨てられた儘が救はれてるのである。疑ふな、疑つてゐるのが信である。佛を舞台に登せて批評してるのぢやない、自ら佛をやつて行くのだ。祈りは一切を教へ全てへの力を與へます。祈りに生きよ、強く強く本當に強く。と私は云はねばなりません。南無阿彌陀佛。」(梵)

吾が朋便り(二)

に不偶な地位に在る身で思ふ様に
ならぬが残念です。

度存候

▲西岡順次兄より 雑誌眞生の創

刊を心から祝ひ申上ます。わざ

と送り下さいまして有難う御

座いました。實は過日來目と耳と

鼻とを一時に病んで毎日通院して

ゐるのです。ここ一月半許りは讀

書と書くことを絶對に止められま

したので、毎日淋しい落付のない

時を送らねばなりません。その内

にお目にかかつてお話し出来るこ

とを待つてゐます。

▲三浦久満男兄より 昨日は眞生

を御送り下さる有難く頂戴いたし

ました、吾々の頼るべき中心、眞

生の發行される事は何處に幸福か

も知れませんが、吾々も出来る丈け

拜聴に参りたいのですが、何分暇

の無い體なので遺憾です。物質的

一投足、萬象は征利的に發達して

行く一點、人間は何處迄來ても決

して變らぬ、欲と色とは娑婆の二

大成分に違ひ無い。

▲鬼塚長次郎様より 眞生の御創

刊を祝しあげます、私二月末日に

古巢に舞ひ戻り農夫に立ち歸りま

した。靜に禊祓を行じつつ神様よ

りの動員令の下るのを待つてゐま

▲澤野武次郎兄より 浮かれ出し

そうな天氣の續いた今日、雪が降

るとは全く意外ですね。眞生今朝

頂戴早速拜見いたしました、仲々

立派な雑誌ですね。

▲宇平光太郎兄より 春の催しに

木の芽もはるかと思ふ矢先き、珍

らしくも雪の訪れがありました、

無理も無駄もない極めて自然な催

しと飾り。先日は眞生御送附に預

りまして有難く拜讀いたしました

た。神と佛に向ふ眞實體驗の發表

なれば今後益々御發展下さい、小

生は唯今試験中ですが其内雑誌の

事に就いても詳しくお伺ひいたし

ませう。

▲宗川宗満兄より 本日は眞生御

送り下さる忝く存候、毎月購讀致

す。

▲片桐照子様より 眞生を御届け

下さつて繰返し拜讀して、皆様の

御苦心と努力との結晶を合掌九拜

して、深く深く自分に引き合せ心

に徹しさせて頂きました……私も

お光の中で念佛精進中に暮らして

頂いて居ります。

▲岩田教順兄より 新らしく「眞

生」の生れる迄の兄の努力をして

今後の運動を人々の爲めに喜び併

せて此れが創刊をお祝ひ申上ま

す。日頃の御所懐が是迄に運んだ

事は兄に取つて可成り御満悦の御

事と思ふ、眞に其名に背かざるの

發展を祈ります、金二圓也御送り

します、内一圓は創刊を祝して御

寄附微意を御受納下さい、あと一

圓は向ふ一ヶ年分誌代です、御手

數年毎月御送り願ひます。

▲綾部康雄様より 眞生御惠送被

下有り難く拜讀、御同封一部甚

だ勝手乍ら一燈園へ寄附致し一同

にて拜讀する事にいたしました候

▲長繩愛眞兄より 過日は眞生と

御手紙有難う。山奥も春めいて來

た、爰でも閑寂は外観のみ……與手

三疊より 夜明けの四時までかかつて編輯を

了へました、餘り一氣にやつて不十分な點が

多いだらうと存じます。試験前に押し迫つて

無理をするから申譯もふいません。前に仕事

が山とあるから一生懸命であり、後から又任

事が押し上げて呉れるから勵む、追ふ力と逐

はれる力。二つとも如來からの賜物であり有

光明會館

自由俱樂部

四月口演(定日毎金曜夜七時)

毎週月水金曜夜、其他隨時

▲七日 拜がむ心 中野善英

○毎 金曜夜 土屋先生座談會(在京中)

▲十四日 體現の宗教 土屋觀道

○第三土曜夜 西川光二郎先生座談會

▲廿一日 私の信仰 宮澤說忍

振替東京四七貳八八番眞生社

▲廿二日 宗教的二つの流れ 中野善英

大正十一年二月二日第三種郵便物認可
大正十一年四月二日發行 毎月一回(一日發行)

▲廿八日 白道への歩み 石上龍應

▲廿九日 近代人の宗教 中野善英

▲三十日 光の中を行く 大野顯道

▲三十一日 人類の宗教的進化 土屋觀道

編輯兼 土屋 觀道
發行人 東京市神田區駿河臺袋町一番地
發行所 眞生社
東京市外西巢鴨町二七二番地
印刷人 原 子 廣
東京市外西巢鴨町二七二番地
印刷所 無我山房印刷工場

其他一二名宛演題未定、(土屋先生御在京中は定
口口 出席)

念佛三昧會案内

時日 四月十一日ヨリ十七日迄

道場 岐阜縣海津郡城山村行基寺

(大垣驛乘換養老線山崎驛下車約八丁)

導師 土屋觀道師

申込 行基寺宛

大正十一年二月三日第三種郵便物許可大正十一年三月三十一日印刷納本大正十一年四月一日發行(毎月一回一日發行)